古都の風 ⑫

桜の下で〝再会〟願い

街を彩った花盛りも過ぎ、気付けば、葉桜の木々が目につくようになった。桜をめでることができる短い時間を待ち望み、人々が訪れる場所がある。花見ではなく、桜の木の下に遺骨が埋められている家族に〝会う〟ために。

ここ数年、注目が集まる自然葬の一つ、「桜葬」を手掛ける右京区の西寿寺を訪ねてみた。ここには、桜葬など自然葬で全国の200人以上の遺骨が納められている。

大半は生前に本人が申し込むという。「好きな桜の下で、自分の思い通りの眠り方をしたい」と希望した、末期がんで余命わずかと宣告された女性。夫と死別後、長年、遺骨を手元から離すことができなったが、桜葬で納骨した後に訪れた春、「主人の花が咲いた」と喜んだ別の女性も今、夫と同じ桜の木の下に眠る。

利用が広がる背景には、価値観の変化のほか、少子化で後継ぎがいないなど現代の家族のあり方が反映していると いわれている。

生前の本人の思いや、家族から感謝の気持ちをつづった手紙が数多く寄せられる村井定心住職(55)は言う。

「残された家族は毎年、決まった時期になると大切な人の〈生まれ変わり〉に会える。花吹雪にその面影を見いだす。それは家族にとってだけではなく、亡くなる人にとっても心のよりどころなんです」

日本人にとって特別な存在ともいえる桜。12日には、祇園で花見客らが犠牲となる事故が起きた。突然、日常が絶たれた犠牲者や遺族の無念はいかほどだろうか。事故の解明が進むことを期待し、将来、遺族らにとって、桜が美しく映る日が訪れることを祈りたい。（増田尚浩）

◇

西寿寺で20日正午から、桜葬の希望者らが参加するお花見会と、大正琴の演奏に合わせて懐メロを歌うイベントを開く。桜葬のように、将来、同じ土地内で眠る者同士は「墓友（はかとも）」と呼ばれ、交流を深める目的もある。一般の人の参加も可能で、参加費は昼食代2500円。17日中に申し込みが必要で、人数制限もある。問い合わせは同寺（075・462・4851）。